

「大阪湾断層帯」について

「大阪湾断層帯」は、図1のように、神戸市の沿岸から大阪湾の南部へ向かって北北東－南南西方向に伸びる長さ約39kmの活断層です。地震調査研究推進本部(以下、推本)によるこの断層帯の長期評価は下表のようになっており、30年以内の地震発生確率は、大阪府付近の陸域の活断層※と比較して小さな値となっています。しかし、「大阪湾断層帯」は海域にあるため、強い揺れだけでなく、断層のずれが海底まで達すると、その上にある海水が持ち上げられ、津波が発生する可能性があり注意が必要です。

※推本による大阪府付近の陸域の活断層の長期評価は、平成27年10月の地震一口メモをご覧ください。

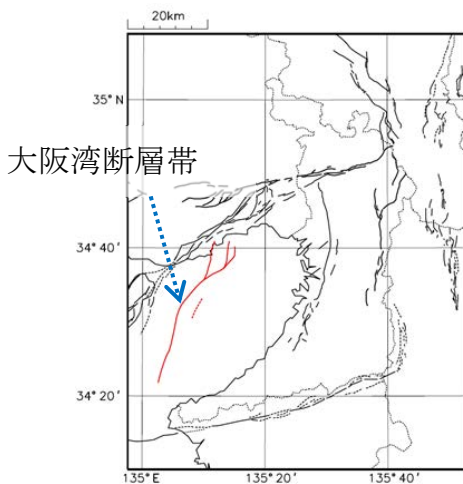


図1 推本による活断層の分布図

大阪湾断層帯の長期評価

最新の活動	1100年以後 ○
平均活動間隔	3000年～7000年程度 △
地震後経過率	0.4以下
30年以内の地震発生確率	0.004%以下 信頼度 b
想定される規模	M7.5程度 ○

データの相対的な信頼性 ◎: 高い、○: 中程度、△: 低い
地震発生確率の信頼度 高 a b c d 低

表 推本による「大阪湾断層帯」の長期評価

「大阪湾断層帯」は断層帯の西側が東側に対して隆起する逆断層です。内閣府は中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」(全36回:最終回は平成20年(2008年)12月2日)の中で、「大阪湾断層帯」による地震が発生した場合の津波の高さを試算して公表しました(図2:同会議の図版を改編して掲載)。この試算では、大阪府の沿岸では堺市から南において高いところで3～5mの津波が算出されています。同会議の中では到達予想時刻には具体的に触れられていませんが、地震発生後短い時間で津波が到達することに留意するべき、というような意見が述べられています。

同会議における「大阪湾断層帯」がずれ動いた際の各影響を試算するために設定された領域。このうち、濃いピンクの部分(浅部断層)のずれが海底まで達して津波を発生させる。

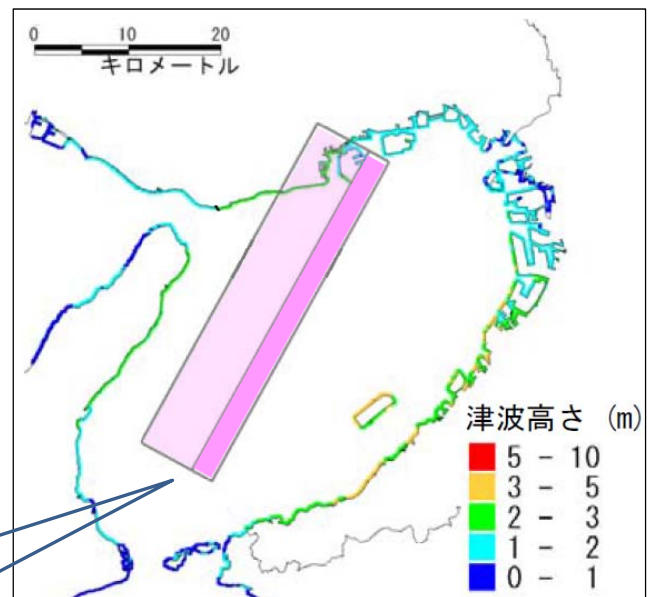


図2 「大阪湾断層帯」による津波の高さ

日本ではどこにいても地震による災害にあう可能性があります。『津波から命を守る』ために、海の近くにいるときに強い揺れを感じたら、または、弱くてもゆっくりとした長い揺れを感じたら、『津波が来るかもしれないから、すぐに海から離れ、高いところへにげる』、という意識を持つことが大切です。